

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）日米センター（CGP）では、2002年度より、米国の非営利団体ローラシアン協会と共同で「日米草の根交流コーディネーター派遣（Japan Outreach Initiative: JOI）プログラム」を実施しています。コラムス第6号は「JOIプログラム特集」として、帰国直後の第4期コーディネーターからの報告と、今夏出発した第6期コーディネーターの「夏季オリエンテーション」の様子を紹介します。

「日米草の根交流 コーディネーター派遣 (JOI)プログラム」 とは

本プログラムは、米国の主に南部地域に草の根交流のコーディネーターを派遣し、日本との交流の機会が比較的少ない地域において日本への関心を高めるとともに、日本理解や地域に根ざした草の根交流を促進し、さらに、草の根交流の担い手を育成しようとするものです。

コーディネーターは、大学や日米協会などに所属し、2年間にわたり、ボランティアとして学校やコミュニティで、日本の文化、社会、生活、日本語に関する知識や情報を提供し、また日米交流を深めるための活動を展開します。

JOIプログラム 第4期帰国報告

村田 有紀子



派遣先：
サウスカロライナ州
コンウェイ
コスタル・カロライナ大学
(Coastal Carolina
University)

2005年7月からJOIプログラム第4期コーディネーターの一人として2年間を過ごし、このたび無事帰国しました。慌ただしくサウスカロライナ州へ旅立った日のことがつい最近のように感じられます。少しの不安と多くの期待を胸に故郷・沖縄から研修先へ。そこで日本での事前研修で一緒だった同期のメンバーと再会できたときの安堵感は今も忘れることができません。そして、派遣先でお世話になるスーパーバイザーのライス教授との対面。「私はあなたのスーパーバイザーとして、一番の理解者としてあなたのそばにいます。一緒に頑張りましょうね」。教授の優しい笑顔と力強い言葉が、これから始まるJOIの2年間のアメリカ生活への大きな励みとなりました。ライス教授は、その言葉どおり公私共に私の一番のよき理解者であり、的確なアドバイスをくださる頼れるスーパーバイザーでした。

私の派遣先であったサウスカロライナ州コンウェイは州の北東部に位置し、米国南部の特徴が色濃く残るのんびりとした町です。隣接するマートルビーチ市は南北にどこまでも伸びる白いビーチを持つ観光都市で、年間1,400万人もの観光客が訪れます。私がお世話になったコスタル・カロライナ大学は、両方の町の特徴を楽しめる場所にあります。派遣先が決まった当初は「大学の周辺には何も無い」と聞かされていまして、どれほどの田舎町へ私は行くのだろうかと思っていました。確かに最初の2、3ヶ月は、生活に慣れるまで少し不自由な思いもしましたが、運転免許を取得し車を購入してからは日々の買い物に困ることもなくほっとしました。週末には川歩きに出かけたり、ショッピングやビーチでくつろいだり、2年間でサウスカロライナの様々な場所へ出かけました。コンウェイ市ののんびりとした自然と人々、マートルビーチ市のにぎやかな海のある雰囲気が故郷の沖縄を思い出させてくれ、私にはとても心地よく住みやすい場所へ派遣していただいたのだと感謝の思いで一杯になりました。

派遣されたコスタル・カロライナ大学は、約8,300人の学生を抱える州立大学です。立地条件が良いので全生徒の約半分が州外からやってきます。学生たちは緑の多い広々としたキャンパスで海洋学やゴルフマネジメント学など、バラエティに富んだカリキュラムで学んでいます。また第二外国語として選択科目の一つに日本語があり、日本の大学とも提携関係にあります。

JOIコーディネーターとして派遣された当初は、辛さや苦さを感じることもありました。大学の教職員へのご挨拶とネットワーク作りが着任後初の活動で、大学での挨拶が一通り終われば、次は図書館や学校などコミュニティへの挨拶。スーパーバイザーと二人だけでこの繰り返しの活動に孤独感を感じることもありました。他の州へ派遣された同期の仲間と

近況報告をし合い、彼女達の活躍を耳にするたびに「私も頑張らなければ」と焦る気持ちが募ることもありましたが、しかし、そう思うたびに「Each site is different. (「派遣先はそれぞれ異なる」)」と自分に言い聞かせていたものでした。同じコーディネーターであっても派遣される州も違えば組織も違うのです。活動内容が初めから違うことも当たり前なことで、トレーニングで再三教えられてきたことを実感することが着任当初は多くありました。しかし、現地に住む日本人の方々と知り合うようになり、ボランティアとして私の活動を支えていただいたり、また個人的にもお付き合いいただいたことにより、この孤独感もなくなっていきました。

この2年間の活動内容としては、大学の講義でのプレゼンテーションと大学行事への参加、大人から子どもを対象にした市民図書館や教会などでの日本文化紹介プログラム、幼稚園から高校までを訪問して授業を行うスクール・ビジット、サマースクール等での授業の計画・運営、またコンウェイ市に進出した日本企業での通訳・翻訳が主でした。また、マートルビーチ市の商工組合のお手伝いで、東京で行われた会議に同行させていただくという貴重な体験もありました。活動を通じて皆さんから学ぶことの多かった毎日、「来てくれてありがとう」「楽しかった」と声をかけていただいたり、後日お手紙をいただいたりしたことが、この2年間の原動力でした。

一番印象深いのは、去年の8月から始めた日本クラブの活動です。ひとつ定期的な集まりを持ちたいと考えクラブを設立し、毎月日本に関するテーマを決めてコミュニティの皆さんへ参加を呼びかけたのです。茶道をテーマにした回は現地日本人の方にデモンストレーションを依頼し、ボランティアの方による和菓子の差し入れもあり、本格的な茶道のお手前を見ようと50人近くの参加者で会場がいっぱいになり大成功を収めました。嬉しいことに、この日本クラブは大学生の有志により今後も続けていきたいという形にまで盛り上げていくことができました。会場の確保や毎月の集まりの告知、ボランティアの方との打ち合わせなど企画の運営には大変な労力を要しましたが、JOIの任期後にも活動が続くのだと思うとその時の苦労も報われます。

2年間で少しでもサウスカロライナと日本との架け橋を築く助けになれたのなら私はとてもうれしく思います。これもスーパーバイザーのライス教授の温かい支えがあったこそだと思っています。そして、このすばらしいチャンスを与えてくれたローラシアン協会と国際交流基金日米センターにも感謝しています。このJOIプログラムでの体験がこれから教師となって教育現場に携わっていきたいという目標の後押しになります。これまでの出会いを忘れず、また新たな道を行こうと思います。

JOIプログラム「夏季オリエンテーション」開催報告

山田 文子

日米センター市民交流課

【新しい日本紹介授業】

「アメリカの学校で日本の紹介をしよう」と言われたら、例えばどんな授業を思い浮かべるでしょうか。ゲスト講師が「特別授業」として浴衣や法被を着てお習字をしたり、「原爆の子の像」のモデルである佐々木貞子さんの話を紹介して、一緒にツルを折ったりすることを私は想像していました。

ところが、JOIプログラムの夏季オリエンテーションで得たアイデアは、そこからさらに一歩進んだものでした。教室で折り紙を折るときは、正三角形や二等辺三角形など図形の名前の確認を。紙芝居は物語の続きを予想する論理的思考の訓練に。日本の地図を見せながら、大洋や大陸の名前をおさらい——。その後の授業でも日本文化をスパイスとして使ってもらえるような提案が随所に織り込まれ、それは、国際理解教育の一つの形であるように感じました。

【1年目コーディネーターの研修】

2007年8月1日、夏休みで混みあう成田空港を出発し、ジョージア州アトランタに第6期JOIコーディネーター5名が集合しました。一週間に及ぶJOIプログラムの夏季オリエンテーションの前半は、まず、新しく各地に派遣される第6期コーディネーターへの研修から始まります。

今回初めて渡米した方もおり、不安と期待が入り混じった面持ちでのスタートでした。新コーディネーターへの研修内容は大きく分けて、プログラムを共催するローリアン協会スタッフからのブリーフィングと、一人ずつの模擬授業、管轄である在アトランタ総領事館訪問の3つです。JOIは派遣される受入団体（サイト）によって

仕事が少しずつ異なるとはいえ、地域の学校を訪問して日本を紹介する活動が軸になります。そのため、スタッフから日米の学校の相違や訪問授業のときの留意点などが詳しく説明され、領事館では貸出用の大型写真パネルや玩具、メディア資料なども見せていただきました。

【「No Child Left Behind」】

中でもスタッフが何度も強調したのが、冒頭に紹介したように、日本文化を紹介しながら学習内容のおさらいをすることです。アメリカでは、2002年に成立した「No Child Left Behind（落ちこぼれを作らないための初等中等教育法）」によって、第3～8学年（小3～中2）の生徒全員に州内統一学力テストを実施し、その結果を公表することが定められました。テストの結果次第で教職員の入れ替

えもあり、統一テストの元となる各州の教育スタンダード（教科・学年別の到達目標）が授業で重視されるようになったそうです。とにかくテストの点数を上げることが求められている教師にとって、日本紹介のような特別授業を受け入れるのは負担とも言えます。JOIコーディネーターは、日本紹介をしながら学習内容を深められる、それぞれの地域・学年のスタンダードに合わせた授業プランを作り、より多くの学校で活動しようと努力しています。

【スーパーバイザー、先輩との対面】

夏季オリエンテーションの後半には、新しいそれぞれのサイトでコーディネーターの指示・監督をするスーパーバイザーと、プログラム2年目を迎えた第5期のコーディネーター及びスーパーバイザーが合流しました。合同研修では、まずコーディネーター・スーパーバイザー同士に分かれ、先輩である5期の方々から、アメリカでの生活の立ち上げや仕事の進め方など体験談を聞きます。続いて全体で5期のペアから一年目の活動報告を受け、さらに5・6期ともに今後の活動計画を発表しました。学校を訪ねての日本紹介授業の他にも、お料理教室を開いたり、歴史や地理を教える教員向けにプレゼンテーションをしたり、JOIコーディネーターの活動は多岐にわたります。生徒に人気のあるプレゼンテーション内容や、現地の日本人コミュニティとの協力例なども紹介され、互いに新しいアイデアや情報を交換する場となりました。

【終わりに】

真夏のアトランタでのオリエンテーションを終え、コーディネーター、スーパーバイザーのペアはそれぞれの派遣地に赴いていきました。その後、オリエンテーション中に話したことをきっかけに、5期と6期のサイトが協力して太鼓の演奏会を開く計画なども進んでいます。また、5期のサイトであるフロリダ州のモリカミ博物館が開催した「Bon Festival」を見学した際には、灯籠流しに参加された方が「アメリカには戦没者追悼記念日（Memorial Day）しかないけれど、日本には先祖や亡くなった家族のために祈る日があるのね」とご自身のご家族の思い出を語ってくださり、一緒に手を合わせました。

JOIプログラムの大きな特徴は、コーディネーターが日本との交流が少ない地域に派遣されること、年間数万人の人へ日本紹介活動を行うことです。算数の授業で初めて折り紙を折った生徒が日本語を勉強し始めたり、上映会で初めて日本映画をご覧になった方が「桜まつり」のボランティアをしてくださったり。コーディネーターの活動は種蒔きのようなものかもしれません。それがきっかけとなって「日本」をキーワードに多くの方が出会い、さらに深い交流の輪が広がっていくことを祈っています。

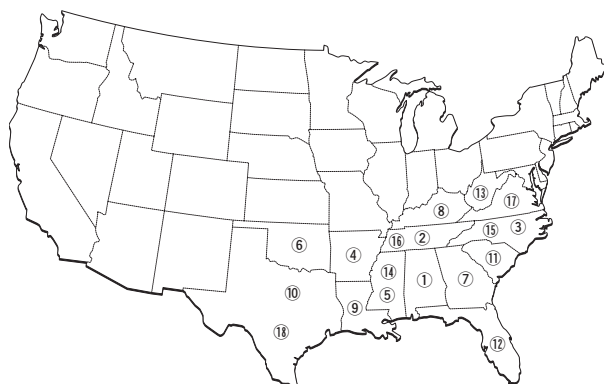


派遣先一覧

期	コーディネーター氏名	派遣先機関	地図
1期	久田 かおり	アラバマ日米協会	①
1期	倉辻 厚子	中部テネシー州立大学日米プログラム	②
1期	小阪田 佳子	サウスイースト・オリガミ/スミス・アカデミー	③
2期	鈴木 丈夫	アーカンソー日米協会	④
2期	徳田 淳子	ミシシッピ・カレッジ	⑤
3期	横野 由起子	タルサ・グローバル・アライアンス/オクラホマ東アジア教育インスティテュート	⑥
3期	高橋 祐子	ジョージア日米協会	⑦
3期	福原 くみこ	ケンタッキー日米協会	⑧
4期	田中 美樹	南部多文化センター	⑨
4期	安藤 良子	ダラス/フォートワース日米協会	⑩
4期	村田 有紀子	コスタル・カロライナ大学	⑪
5期	小島 祥子	アラバマ日米協会	①
5期	木谷 公子	モリカミ博物館	⑫
5期	織田 美千子	ベサニー大学	⑬
6期	山田 悠花子	クロフト・インスティテュート・フォー・インターナショナル・スタディーズ	⑭
6期	西脇 笑子	ウェスタン・カロライナ大学	⑮
6期	松下 佐智子	メンフィス大学国際プログラム&サービスセンター	⑯
6期	山崎 和子	ハリファックス公立学校区	⑰
6期	増田 環	サンアントニオ日米協会	⑱

●JOIプログラムの詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.jpfi.go.jp/cgp/fellow/joi/index.html>



第4期 帰国報告



この2年間を振り返ると、非常に多くの、そしてあらゆる年齢・国籍・分野の方に会ったことが思い起こされます。私が派遣されたダラス・フォートワース日米協会 (JASDFW) はテキサス州のダラス市及び隣接するフォートワース市を活動の対象としています。組織としての歴史が長

く、文化交流のプログラムも活発に行われており、経験も豊富なサイトでした。ダラスとフォートワース周辺には多数の日系企業が存在し、永住権をお持ちの方以外にも、数年間滞在される駐在の日本人の方も数多くいらっしゃいます。日米協会の他に、秋祭りの主催や日本語補習校を運営する日本人会もあり、日本人コミュニティはすでに地域に定着していました。



安藤 良子

派遣先：テキサス州 ダラス
ダラス・フォートワース
日米協会
(Japan-America
Society of Dallas/Fort
Worth)

大都市ダラスにおいては、日本語を学んでいる方やJETプログラムなどで日本に長期滞在した方も沢山いらっしゃるの、日本文化紹介関連のイベントの際には、突然流暢な日本語で語りかけてくださる方やアニメの話もされる方も珍しくありません。その反面、日系企業が集中する地域から少し離れると、アジア人など見たことがないというヒスパニック系、あるいはアフリカ系アメリカ人のコミュニティなども多く存在します。そのような地区の学校で日本文化を紹介するプレゼンテーションをする際には、校内を歩いているだけで注目を浴びたり、中国人と間違われ、「チャイニーズ?!」という声が聞こえてくることもありました。文化紹介活動はとても責任のある仕事であり、子どもたちにとって初めて会う日本人が自分であること、彼らがこの先大人になるまで、私の与える印象が日本人全体の印象として続くことを思うと、JOIプログラムの活動一つ一つが、自分だけでなく周囲にとっても貴重な出来事であったと再認識させられます。

私のJOIコーディネーターとしての仕事は、手探りで草の根交流活動を新たに切り開いていくというよりは、既にあるものを改善すること、マンネリからの離脱、これまでに実現できなかったプログラムを手がけることが常に課題となっていました。その中で最も力を入れてきたのがJASDFWの教育部門の要ともいえるJapan-in-a-Suitcase (JIS) プログラム (スーツケースの中に日本で一般的に使われている様々な物が4種類の異なるトピックスに合わせて入れられており、それを見せながら日本でどのように使われるかを1回約50分ほどで説明するプログラム) でした。2005年の秋から任務終了まで380回以上に渡る発表を行い、子どもから大人まで9,500人を超える方々に、日本の学校生活、家庭での生活、祝日や行事、紙芝居、童謡や折り紙などを紹介してきました。生徒たちの反応が大きかったものとしては、浴衣の着付けのデモンストレーション、鉛筆削りつきの筆箱、和式トイレとウォシュレットの紹介、お年玉について、などがあります。日本では当たり前のように使われている物や「日常」的な習慣が、一歩海外に出ると「非日常」と

して受け止められるということは、文化を教える側にとっても学ぶ側にとっても、大変興味深いことの一つなのかもしれません。

JISプログラムの改善を目指し組織した教育プログラム委員会では、月に一度会議を設け、委員会を構成する現役の教育者の意見を取り入れながら、JASDFWの文化教育活動における短期・長期的ゴールの設定と課題を明確にしていきました。中でも、委員会のメンバーでもあるダラス学区の小学校の先生を中心として開催されたTeachers' Workshopは、私の2年間のJISプログラム改善プロジェクトの最終ゴールでもありました。テキサス州では、幼稚園から進級テストがあるため、学校の先生方はカリキュラムを大変重視します。新JISをより効果的なプログラムにするために、JISのプレゼンテーション内容を州が定める教育スタンダードに見合ったものにするには、先生方の需要とJASDFWの供給のバランスを取る上で、必須だったといえます。

JASDFWにおいての仕事は、JIS関連の業務だけでなく、年に数回行われるフェスティバルやアジア・国際関連のイベントでの文化紹介ブースの企画・運営、その他特別プログラムや会の実施、季節ごとの定例行事の開催、オフィス内での庶務も含まれます。イベント関連業務で一番大変だった事は、ボランティア集めと管理でした。新年恒例の餅つき大会など、規模の大きなものになると70人を超えるボランティアの方の協力が必要となります。70人全員が同じ仕事をするわけではなく、役職もシフトも、各々の都合も異なるわけで、その一人一人とEmailや電話でコミュニケーションを密にしなければなりません。シフト決めはまるでパズルのようであり、役職決めはその方の適性や要望を考慮するなど、非常に細かい作業が何週間にもわたって続きます。イベント終了後、手伝ってくださった皆さんに感謝の気持ちを伝えると、「楽しかった」、「また声を掛けて欲しい」など温かい反応が返ってきます。このような言葉は大変な仕事の励みとなるだけではなく、ボランティアで知り合ったことをきっかけに、今では良い友達となった方も沢山います。



この2年間で達成した目標や、様々な実績、築き上げた人間関係は、今後どんな道に進んだとしても確かな土台となり、さらに力強く発展していくことでしょう。JOIプログラムに関わる全ての方々、またダラスでお世話になった沢山の方々、この場を借りてお礼申し上げます。

国際交流基金日米センター

Tokyo Office

〒107-6021 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル20階
知的交流課 TEL. 03-5562-3542 市民交流課 TEL. 03-5562-3543 FAX(共通). 03-5562-3504

New York Office

The Japan Foundation Center for Global Partnership, New York
152 West 57th Street, 17th Floor, New York, NY 10019 U.S.A.
TEL. 1-212-489-1255 FAX. 1-212-489-1344

今月のコラム

「日米草の根交流コーディネーター派遣(JOI)プログラム」は、CGPが2002年度から行っている主催事業です。日本との交流の機会が比較的少ない地域、主に米国南部に草の根交流のコーディネーターを派遣し、日本への関心を高め、日本理解や地域に根ざした交流を促進し、さらに、交流の担い手を育成しようとするものです。コラム第6号はJOI特集号。帰国直後の第4期報告と今夏のオリエンテーションの様子を通し、JOIの活動、意義をご紹介します。

JOIプログラム 第4期帰国報告

コスタル・カロライナ大学
村田有紀子



夏季オリエンテーション 開催報告

市民交流課
山田文子



第4期帰国報告

ダラス・フォートワース日米協会
安藤良子



日米草の根交流コーディネーター派遣プログラム 募集説明会を開催

全国6都市で第7期コーディネーターの募集説明会を開催いたします。詳細・お申込に関しては、こちらのウェブサイトをご覧ください。
<http://www.jpff.go.jp/cgp/fellow/joi/boshu.html>

日米センター(CGP: Center for Global Partnership)とは日米が共同で世界に貢献し、緊密な日米関係を築くことを目的として、1991年に国際交流基金に設立されました。日米センターでは、両国のパートナーシップ推進のための知的交流と両国の相互理解を深めるための地域・草の根交流の2分野で交流事業を行なっています。

知的交流

地域・草の根交流

編集 後記

今号は草の根交流プログラムのひとつ、JOIの特集号です。このプログラムを通して、政策に貢献する研究から、ひととひとが柔らかく触れられるような交流まで、CGPのミッションである様々なかたちで日本と米国を繋いでいけたらという思いと活動を、少しでも感じとっていただけたら幸いです。そして、秋には新しいガイドラインも発表されます。CGPの進展に、更なるご支援とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。(nn)

本紙に関するご感想・ご意見をお寄せください。 日米センターURL:
E-mail cgpnewsletter@jpff.go.jp www.jpff.go.jp/cgp

2007年9月15日 発行/無料